

『県別・全国市町村百科／ふるさと日本』

「茨城県牛久市」

本文

鈴木道信

一九八六年（昭和六一）六月一日に市制を施行した牛久市は、関東地方の中央、茨城県の南部に位置する。西部をJR常磐線と国道六号線が平行して南北に通じて首都東京と水戸市を結び、東西に小野川に沿って走る国道四〇八号線は西はつくばへ、東は成田へ通じている。

縄文時代は海辺の里

上野駅から常磐線の電車に乗り、四〇分ほどすると

利根川を渡って茨城県に入り、一面の水田がひろがる低地を一〇分くらい走る。この低地は、縄文時代は海であり、海が退いた後も低湿地で江戸時代に関開されて水田となつたところである。電車が台地に近付くころ、左手に牛久沼が見えてくる。牛久沼も縄文時代及び古墳時代の前期頃までは洋洋たる海水が流入していた入り江であり、江戸時代に溜池として整備されはじまるまでは、もつと広がった。沼を過ぎると台地上上がり、右手に大きな住宅団地が見えてくるとまもなく牛久駅に到着する。

牛久市は、稲敷台地と呼ばれる台地上にあり、標高はほぼ二〇数メートルである。この稲敷台地を縫って、二つの川が流れている。一つは牛久市の中央部を東西に流れる小野川である。もう一つは、小野川と平行してその北側を流れる乙戸川で、牛久市東部の島田付近で小野川と合流し、江戸崎町を通って霞ヶ浦に注いでいる。二つの川の流域は幅約三〇〇メートルの沖積平野をなしている。

今からおよそ五、六千年前の縄文時代、海水面が上昇し、小野川、乙戸川の流域にも海水が押し寄せ、それは小野川では正直付近、乙戸川では久野付近にまで及んだと推定されている。小野川も、現在とは違い、荷物を載せた舟の往来する大河であった。西部でも、入り江であった牛久沼に続く低地には海水が流入していた。狩猟・採集にたよつ

ていた当時の人々にとって、貝や魚がとれる海に近く、木の実などの豊富な森であった台地は、たいへん住みよい土地であったと思われる。実際、縄文時代の住居址や貝塚などの遺跡が、牛久沼周辺や小野川及び乙戸川流域に多く見つかっている。

縄文時代末期には、一時気温が低くなって人口が減ったようであり、その時代の遺跡は発見されていないが、その後はふたたび気温も上がり温暖な気候で住みよい土地になったと思われる、弥生時代、古墳時代の遺跡も数多く発掘されている。

牛久の戦国時代

現在の牛久市域は、前身の牛久町が一九五五年（昭和30）に合併により成立した時に定まったが、それ以前、ひょうたんのような形をしている市域はくびれた部分を境として、東側は河内郡、西側は信太郡と、別の行政区画に属していた時期がほとんどであった。しかし、戦国時代には岡見氏が、現在の牛久市域から西は伊奈町およびつくば市南部にいたる一帯を支配する。この岡見領の東部は、北、東、南を江戸崎領に接し、現在の牛久市とほぼ似た形であり、のちに牛久市が成立する歴史的前提がここにあるとも考えられる。また、「うしく」という地名が史料に現れてくるのも、この頃である。一五六四年（永禄七）の小田氏

味方覚書に「うしよくおかみの山しろ」とあり、「うしよく」の城（牛久城）に岡見山城守が拠っていたことが書かれている。

岡見氏については不明な点が多いが、小田氏との関係が深いと考えられている。一五世紀以前から河内郡岡見郷（現在の岡見町）を本拠とし、一五世紀末～一六世紀前期の小田氏の発展とともに河内郡中央部から北部にかけて勢力を伸し、本領の岡見郷に岡見城を維持しながらも、惣領家（岡見山城守）は牛久城に拠り、また有力庶家（岡見弾正）は矢田部城（現在のつくば市谷田部）に、旗下の近藤氏は新地の東林寺城に拠っていた。しかし、小田氏が北の佐竹氏・多賀谷氏に敗れてからは、小田原の北条氏に接近し関係を深めていくことになるが、北条氏が豊臣秀吉に滅ぼされるのにもない、岡見領も北条氏領と同様に没収されてしまう。岡見領の東半は、由良氏に与えられる。

その後、徳川時代には、地域の西部は由良氏にかわって山口氏が入封して牛久藩になり、東部は関宿藩領となって明治維新を迎えることになる。

水戸街道の宿場町

牛久町の旧国道に沿う街が、かつての牛久宿で、江戸時代から明治の初期にかけて、水戸街道の宿場として

にぎわい、発展した。牛久宿の成立は、江戸時代の初期の水戸街道の整備に伴うものと考えられるが、牛久市域が都と常陸を結ぶ道の中継地としての機能を果たすのは、遠く古代にさかのぼる。

大和の強力な政治権力がこの地にも及び始めた古墳時代の道が、古墳の分布から推定されているが、それによると南の下総方面から茨城国（現在の石岡市周辺）へ向う道が牛久市の東部を、その道から分れて筑波国（現在のつくば市周辺）へ向う道が、市西部を通っている。その後、大化改新（六四六年）により地方の行政区画が整い、常陸国は畿内七道の一つの東海道の一番禺に置かれて陸奥（みちのく）攻略に重要な位置を占めるようになり、官道も整備される。その路線は相模国から武蔵国を通り、下総国から常陸国へ入る。その頃、下総と常陸の間には、榎浦流海と呼ばれる広大な海が広がっていた。下総の於賦の駅家（現在の我孫子市）から舟で榎浦流海を渡り、常陸国最初の玄関口榎浦の津（現在の龍ヶ崎市と考えられている）に着き、信太郡（牛久市の東部を含む）の郡衙や榛谷駅家を通り、北へ進み、霞ヶ浦を渡って常陸国府（現在の石岡市）に至った。最新の研究によれば、牛久市の奥原町にある八幡台遺跡からは公共施設として造営されたとと思われる掘立柱住居址が多数発掘されており、また信太郡の郡衙が隣接する江戸崎町下君山の地にあったとされているなどから、この地が榛谷駅家ではないかと推定されている。

この道は、現在の地図上で見るとずいぶん迂回をしてい
るようであるが、当時はまだ海水が川沿いにかなり侵入し
ていたと考えられ、また信太郡の郡衙を経由するためにも、
船を利用するこの経路が利用しやすかったのである。
室町時代ころ、常陸国府が政治、文化の中心的存在を失墜
するとともに下君山の郡衙も機能を失うと、河川に侵入し
ていた海水も退いて陸路も通り易くなっていたことから、
この官道も衰退したといったと考えられる。
現代の水戸街道である六号国道は、大型トラックが昼夜
絶え間無く通り、茨城と東京を結ぶ大動脈となっている。

天皇の行幸と女化原の開拓

牛久町の旧国道に沿った飯島家の正門脇に「明治天皇
牛久行在所」の碑がある。

一八八四年（明治一七）一一、十二月、女化原（現在の
女化町）で、ロシア製のクルップ式野砲を導入した近衛
砲兵大隊が大演習を実施しており、明治天皇の行幸、閲兵
が行なわれた。明治帝は、一二月七日行在所飯島家に到着、
翌日は演習を閲兵、翌々日お帰りになった。

地元では、本県初の御臨幸とあって、河内郡役場が中心
となって、対策や準備にあたった。この行幸は、東京から
馬車を列ねて、現在の六号国道を通って行なわれたのであ
るが、牛久沼に沿った部分は二年前の一八八二年（明治一

五）に開通したばかりで、行幸に際しては道路改修が必要となり、周辺の村から五二九名が動員された。

演習の行なわれた文化原は、明治に入った頃はまだ、

人家のほとんどない荒野であったが、この演習の前後から

開拓が始まった。一八七七年（明治一〇）、

元老院議員和歌山土族の津田出が大農式開墾に着手するが

失敗に終わったことがある。したがって、この発展の出發

は、一八八三年（明治一六）最初の入植者にはじまり、つ

いで、一八九〇年（明治二三）、山梨県、茨城県（猿島郡）

、福島県、埼玉縣などから五家族が入植、翌々年の一八九

二年には四〇家族の入植者を数えるにいたった。そして、

この翌年、入植者子弟のため、文化尋常小学校が、入植者

たちの熱意によって、私立として設立されている。文化原

開墾農家戸数はその後、一九三九、一九四〇年（昭和一二、

一五）ごろには、二〇〇戸以上に増加していたが、その多

くは、明治末から大正期にかけての入植者であり、また、

彼らの出身地域は、県内では猿島郡が最も多く、また県外

では、徳島、千葉の両県を筆頭とし、二府二県にわたつ

ていた。

この他、明治期には、旧牛久藩土による牛久駅東側の

東区や岡見原の開拓などがあり、第二次大戦後は、奥野

地区や現在の栄町などの開拓がある。

東京のベッドタウンとして

牛久市の前身である牛久町は、一九五四年（昭和二九）、当時の牛久町（現市域の西部）と岡田村（現市域の中央部）が合併、さらに一九五五年に奥野村（現市域の東部）と合併して生まれた。この当時の牛久町は、人口およそ一五〇〇〇人、常磐線には蒸気機関車のひく列車が一時間に一本程度（片道、普通列車）走るといふ、のどかな純農村地帯であった。

しかし、一九六一年（昭和三六）に常磐線取手～勝田間が電化されて電車が走るようになり、一九六六年（昭和四一）に首都圏近郊整備地帯に指定される頃から、宅地開発が進み始める。一九六三年（昭和三八）から一九七〇年（昭和四五）の間に許可を受けた民間業者による宅地開発は、区画数二五程度の小規模のものから一〇〇〇に近い大規模なものまで三〇件ほどあり、一五四ヘクタールの山林が宅地に造成された。これらは、都市計画法による線引き（市街化区域および市街化調整区画の決定）以前に行なわれたため、ばらばらに山林を切開いて行なわれ、いわゆる「虫食い」状態となったが、一九七〇年（昭和四五）には、線引きが行なわれ、乱雑な宅地開発を押えるとともに、刈谷地区で土地区画整理が始められる。区画整理は、その後、栄町、駅東地区、柏田でも行なわれる。

人口増加が顕著になるのは、一九七〇年頃からである。当時、常磐線取手以南の混雑は甚だしいものがあり、一九

七一年には我孫子まで複々線化されるのであるが、東京周辺における人口増加の波が牛久にまで押し寄せてきたのである。この複々線化により、上野まで一時間一〇分以上かかっていたのが、五五分程度に短縮されたことも、牛久をより東京に近いものにしたのである。転入人口は、一九七三年（昭和四八）三〇七一人、一九八一年（昭和五六）は四五八九人、転入者の出身地は、一九八一年の場合、東京から一四五一人、県内から九四二人、千葉から八三一人、神奈川から五二〇人、埼玉から四〇九人となっている。一、二の例を上げると、牛久駅西側の宅造団地つつじヶ丘の場合、一九七〇年の世帯数九六が一九八〇年（昭和五五）には七二二に、そして一九八七年（昭和六二）には九〇四世帯、駅の東南側のみどり野では、一九七〇年には〇だったのが、一九八〇年には一一七五世帯に、一九八七年には一九七六世帯に飛躍的に増大していった。また旧集落でも駅北側の田宮などは、町村合併以前六〇戸にすぎなかったが、一九八七年には七一四戸に膨張している。人口の増加は、主として東京方面への通勤世帯の増加であり、一九八五年（昭和六〇）の市外通勤者一三〇〇八人のうち、東京都へ五九九四人、千葉県へ一三二六人となっている。これを裏付けるように、牛久駅の乗降人員は、人口の増加に比例するように急激に増加している。

自立都市をめざして

牛久駅に降り立ち、西口に出ると二三階建ての再開発ビルが見え、東口に出ると広い都市計画道路が一直線に東に伸びているのが見える。駅の周辺には、整然と区画された町並みが広がり、住宅が立ち並んでいる。しかし、車で五分も走ると、そこには昔のままの自然が残されている。

牛久市の特徴は、「一戸建ての住宅群」と「豊かな自然」である。三階以上の集合住宅は数えるほどであり、持家の比率は約九〇パーセントである。土地利用は、宅地は増えているとはいえ約一四パーセントであり、山林は減つてきたが約二八パーセント、農地は約四〇パーセントである。

一九六五年（昭和四〇）頃までの純農村から、それ以降宅地開発が進み、東京のベッドタウンとして発展してきた牛久市であるが、この間「自立都市牛久」をめざして、様々な方策がとられてきている。

整然とした町並みは、土地区画整理によってできたもので、刈谷、栄町、柏田、駅東の区画整理された土地の面積は合せると約二五〇ヘクタールになる。さらに、これから実施される田宮東、富士久保、牛久北部の分を合せると約四六〇ヘクタールになり、市街化区域全体約一一三〇ヘクタールのおよそ四〇パーセントを占めることになる。山林であった駅東側も、これによって東口駅前広場として整備された。

雑然とした商店街であった駅西口周辺は、再開発事業により一九八七年に一三階建ての再開発ビル「エスカード牛久」が建ち、中心商業地区となってきた。また、都市計画道路の整備にともない、スーパーをはじめ飲食、靴、衣服、書籍、電気などの郊外型店舗の出店も相次いでおり、一九八八年には、独自の商圈を形成するに至り、周辺の町市をその商圈下においている。

地域の四〇パーセントを占める農地については、一九六五年（昭和四〇）頃から、小野川流域の土地改良や稲荷川流域の圃場整備、農道の整備などが進められ、都市近郊型農業の充実が図られている。牛久市の工業は、小規模零細な事業所が主体であったが、一九八四年（昭和五九）頃から、奥野地区で桂と奥原の二つの工業団地の造成が始まり、現在八事業所が立地している。

つくば・土浦・牛久業務核都市の一つの核として

牛久市は、首都圏整備計画等により、都心に集中している各種機能を分担するための「業務核都市」として位置付けられており、「つくば・土浦・牛久業務核都市」の一つの核として、商業・業務、居住、レクリエーション機能などを複合的に整備した「一〇〇万田園都市圏」の一翼を担うことが期待されている。

一九八五年（昭和六〇）につくばで開催された科学万博
の時の臨時駅であった万博中央駅の跡地を中心にして
区画整理により開発が進められている北部地区は、
業務地区及びつくばの玄関口として、臨時駅の跡地に新駅
の設置が数年後に計画されている。